



中村中江津市長

対策が最重要課題となつていま
す。2022年度の出生数が、市と
して初めて100人を割り込みま
した。将来の江津市を担う子ども
たちをどう増やすのか、どのよう
に育てるのか課題も多く、やるべき
ことも多岐にわたります。小中高
に大学を加えた連携も一つの方策
ですね。

学長 人口減少は、大学にとつても
大きな課題です。今後、18歳人口が
さらに減少するため、大学志願者
の総数は減少していきますが、そ
の中で、入学者を確保していく必
要があります。そのために最も重
要なことは、「島根大学に行きた
い」となるように高校生を惹きつけ

る特色ある教育プログラムを創ってい
くことと考えています。また、本学で
学んだ学生に、卒業後にいかに江津
市も含めた島根県内に定着してもら
うか、というのも大きな課題です。

市長 島根県は東西に長い地理的な
要因もあり、県西部地域と島根大学
とのつながりの深さというのは、松江
や出雲といった県東部地域とは異な
ると思います。このような状況の中
で、県西部出身の学生に「地元に戻り
たい」と思ってもらうにはどうすれば
いいのか悩むところです。

学長 先日、国立大学の学長が集ま
る会議に参加した際、同様の問題が
話題になりました。近畿地方のある
県では南北問題という同様な課題が
あるとのこと、こういった問題は島
根県のみではないようですね。

市長 江津市では、地域に誇りを
もってもらおうと小中学校でのふる
さと教育を推進しています。島根大
学の学生さんたちにも、ぜひ現場に
入っていただき、運営支援や指導者と
して関わってもらえればと思います。
それによって、学生さん自身にも地域
に対して愛着や誇りを持ってもらえ

るのではと思います。

学長 大学と地域の関わりを考え
たとき、地域住民の方々や大学との
関係も課題です。大学としては垣根
をなくして、もっと住民の方々にと
中に入ってもらえるように、気軽に
集っていただける場所を学内につく
るのも必要かと思えます。住民の
方々には新たな気づきがあり、企業
にあつてはイノベーションにつながる
かもしれません。

**連携を深めることと
地域の価値を再発見へ**

市長 学生さんや教員の皆さんに
は、ぜひ江津市を訪れていただきた
いと思います。様々な分野での研究
はもちろん、江津市の雰囲気を感じ
てもらえればと願っています。私た
ちが気づいていない江津市の価値を
一緒に探していきたいでしょう。

学長 今後は、市民の皆さんとの直
接的な関係づくりができる機会や
場所を設けていきます。江津市の皆
さんにとって島根大学がより身近な
ものなることを願っています。

新たな官学連携に向かって

～地域が求めるニーズと大学のシーズ(技術)を結び付け、真の課題解決につながる取組を推進～



江津市長

島根大学長

中村中 × 服部泰直

2023年8月、島根大学と江
津市は、まちづくりや産業振興、
地域医療などの分野で協力する
包括連携協定を締結しました。今
回の協定締結により、県内全ての
「市」と協定を締結したことになり
ます。江津市の中村中市長と服部
泰直学長に現在の課題、今後の連
携について思いを聞きました。

**包括連携協定を機に
幅広い分野で連携を推進**

服部学長(以下学長) 江津市は、
江の川の下流域の地理的な課題を
抱えながらも、伝統的な工業や製造
業の盛んな工業の町というイメージ
があります。2023年4月、本学で
は新たに材料エネルギー学部を創設
しました。新素材・材料の研究・開発
を通じて、最終的にはエネルギー課
題を解決するというのが目標です。

中村市長(以下市長) 江津市で
は、企業誘致や有福温泉の再生、シ
ティプロモーションを進めています
が、2023年6月の市議会において、
2050年に炭素排出量ゼロを目
指す「ゼロカーボンシティ宣言」を行

ました。なかでも、風力、太陽光、バイ
オマスなどの再生可能エネルギーの
活用に注力することになっています。こ
の取組と材料エネルギー学部の研究
は、親和性が高いと感じています。

学長 材料エネルギー学部はもちろ
んですが、本学は文系・理系・医学系
7学部からなる総合大学です。ほぼ
全ての分野での連携が可能だと考
えています。

市長 地域課題は多岐にわたります
ので、とても心強いですね。

**共通課題である人口減少を
乗り越える取組を**

市長 江津市では、人口減少への



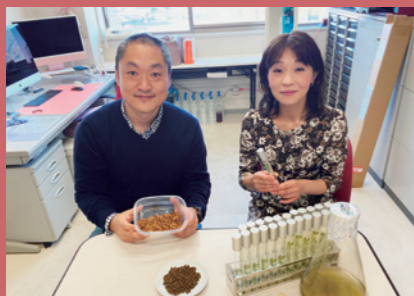
服部泰直島根大学長

check!!

アユの飼料開発

江津市、島根大学、アユ種苗生産
施設を持つ江川漁業協同組合と連
携し、アユの成長促進と低コストを
実現する飼料の開発が始まっていま
す。飼料には、島根大学生物資源科
学部の宋助教と児玉教授が研究を
進めている食用幼虫を活用。アユの
成長段階に合わせて、孵化40日まで
は、栄養的にも適していると予測さ
れる大型ソウリムシと、細胞内にク
ロレラが共生しているミドリソウリ
ムシを、孵化40日以降は昆虫食の期
待種として注目されるミールワ
ームの活用を予定しています。

江津市内で1日あたり100キ
로그램発生しているとされる学
校給食の食品残渣を活用して食用
幼虫を育て、持続可能で自然環境に
やさしい飼料の開発を目指します。



生物資源科学部の宋助教(左)と児玉教授(右)